ザ☆ドラえもんズ　～僕らの専属ドクター～

天涯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ザ☆ドラえもんズ　～僕らの専属ドクター～

【Ｎコード】
Ｎ８６７３Ｎ

【作者名】
天涯

【あらすじ】
ロボット養成学校時代、医者志望の王さんと生傷の絶えない仲間達の短編連作。基本的に各話完結ですが微妙にリンクしていたりいなかったり。　※擬人化です

エル＝マタドーラの場合

「わーんさん、今いいっスかー」

実習が終わり、代表で保健室に備品を戻しに来ていた王の所へひょこりと派手な頭の友人が顔を出した。

「何ですかマタドーラ。性懲りもなくまたどこか怪我したんですか。今度はどうしたんです、牛ですか？　バイトですか？　女性ですか？　喧嘩ですか？」

「牛です。突進くらって避けそこねてさあ、ちょいザクッと」

「軽く言わないでください。大体貴方、私のこと何だと思ってるんです。体よく使われてる気しかしないんですが」

「まあまあ、実地で腕試しできんだからいーじゃん。ほいヨロシク」

いっこうに効力を発揮しない苦言に溜め息を零しながら、悲しいかな慣れてしまっている体が半ば自動的に動いて救急セットを用意する。マタドーラの方も慣れたもので適当なイスを引き寄せて座り、カッターシャツのボタンを外して左に大きくはだけた。

応急処置らしく雑に腹に巻きつけてある白い布。そこに赤い色がうっすらと滲んでいるのを見て王は眉を寄せた。

慎重に布をほどいて表れた傷口に息を飲む。

牛の角にえぐられたのだろう。ざっくりと刻まれた荒い切り傷からオイルが未だじくじくと染み出し、体内の配線の一部が見えている。

線が切れていないのがせめてもの僥倖だ、そこまでいっていたら

王の手には負えなかった。

「……何が『ちょいザクッと』ですか、これ明らかにそんなレベルじゃないでしょう！　本当に貴方馬鹿ですね、馬鹿だ馬鹿だと思ってましたがやっぱり相当な馬鹿ですね！」

「バカ連呼すんな！」

「連呼せずにどうしろと！？　これだけの怪我でよくそんなヘラヘラしてられますね、もう少し自分の体を大事にしろと何回言えば」

「あー解ってるよ」

「解ってないから言ってるんですよ！」

「解ってるって。でもさぁ、今日のこれはしょーがねーの」

いつもと変わらないへらっとした笑顔で、この馬鹿牛はなんでもないことのように言い放つ。

「俺が避けきったら他の奴に直撃するコースだったんだよ。そいつわりとひょろいし、俺が当たっといた方が確実に被害少なくて済むと思って。実際これで済んだわけだし？」

なんてったって図太さと頑丈さがウリですからね、こーゆー時に体張らねえと。

気負うでもなく当たり前の顔をしてしゃらっとのたまう親友に、殴り飛ばしたいような抱きしめたいような声を限りに説教したいような泣いてしまいたいような相反した気持ちがいっしょくたに膨らんで、王は黙って唇を噛んだ。

そんな風に、他の誰かを傷つけまいとするとき、自分が盾になることしかできないままでは。

いつかこの男は、それで身を滅ぼすのではないかと。

優しいばかりに。馬鹿なばかりに。不器用なばかりに。

「……痛く、ないんですか」
「ん？　痛ェよ一応。今は麻痺してっからそーでもねえけど、あっでも左腕はしばらく上げらんねえかも。皮つっぱってけっこー響くんだわこれが」
「本当につくづく馬鹿ですね」

私は昔からそのことが何よりも、怖い。

くっと顔を引き締めて救急セットの中から最適と思われる器具を選び出し、小さくたたんだ手ぬぐいをマタドーラに差し出す。

「さっさと治すために縫いますよ、馬鹿に使う麻酔が惜しいので舌噛まないようこれ咥えてて下さい。運が良いですねマタドーラ、縫合はちょうど今日実習で教わったばかりなんです。その怪我を昨日負わなかったこと感謝するがいいですよ」
「え、マジで？　俺本番第一号？　怖っ、怖いからその科学者がモルモット見るよーな目をやめてくれ！」

手当てが終わったら「今度からは自分と周りが同時に助かるような手を考えろ」と説教してやることに決めて、王は縫合用の針をライターの火で念入りに炙った。

エル＝マタドーラの場合（後書き）

はい、という訳で初投稿です。気長に見守ってやってください。字が詰まってて読みにくいですねすいません……しかしこれからずっとこんな感じで行きます。覚悟！↑

エルと王のコンビは夢が膨らみます。喧嘩仲間万歳……！

ドラえもんの場合

調理実習中。いつもの七人で班を組み、手分けして下ごしらえやら器具の調達やらクラス中がばたばたと動き回っていたとき、同じ調理台から「わあっ」と小さく叫び声が上がった。

「おい、えもん大丈夫か？」
「どしたのー、指切った？」

我らがリーダーのいつものドジが出た、とのんびり構えている場合ではなさそうだ、今回は。思いのほか深く切りつけたらしく、指先から溢れだした赤はかなりの勢いでぽたぽたとまな板を染めていく。

当のドラえもんは軽くパニックになっているらしく中途半端に手を持ち上げて、切っていた野菜にオイルがかからないよう遠くに腕を伸ばしながらわ、わ、とその場で足踏みばかりしている。

「えもん、落ちついて。早く切ったところ水で流して下さい、ほら」

反射でつい口が出てしまう、医療コース選択者の本能だ。水道へ肩を押しやり、レバーを押して手を差しださせた。透明な水流に押されてねばりついていた赤い色が溶けるように流れ去る。ちょこちょこと寄ってきたニコフが横からそっとポケットティッシュを差しだし、気の利く友人に微笑んで礼を言った王はティッシュを何枚か抜き取って水を止めた。

「これで傷口押さえて、念のため肩より上にあげてて下さい。……まあ流石に包丁で破傷風はないでしょうし……えーと」

まくり上げていた四次元袖を戻して中を探る。ニコフが引いたポジションに入れ替わりにメッドが入ってきて、まな板を洗い流し始めた。のっかっていた切りかけのナスはどこへ行ったのかと思いきや、ザルに居を移してなぜかリーニョの頭の上でバランスを取られている。

「あー、キッドずるい！　つまみぐいした！」
「だって腹減ってきたんだもんよー」
「つか、生のナスって美味いわけ？」
「そーでもねェなー」
「リーニョ、そのザル寄越してくれ。我輩続きをやるであるから」

ようやく目当てのものを探り当てた王はドラえもんに声をかけ、指を見せてもらった。ティッシュはそれなりに赤く染まっているが出血は順調に止まってきている。そこへぺたりと絆創膏を巻きつけた。

「防水仕様になってるやつですけど、一応ドラえもんはなるべく手を汚さないことをした方が良いですね。替えも二、三枚渡しておきますから」
「うう、ありがと王……」

眉尻を下げたドラえもんは、てきぱきと始末を済ませて次の作業にかかっている仲間達に、情けなさそうに肩をちぢこまらせた。

「ほんと、いつもごめんねみんな……僕がドジなばっかりにやること増やしちゃって……」
「バーカ、気にすんな気にすんなそんなん」
「どーんまいっ！」

即座にキッドが一言で切り捨て、リーニョも続いて明るく叫ぶ。
「手間をかけるのは皆お互い様であーるよ」
メッドがゆったりと笑う。その横でニコフも何度も首を縦に振った。見事に全員「気にしてませんよ」感を全身で表している。
「よーぉし、えもんこっち来い！」真向かいのコンロの位置からマタドーラが手招きした。
「お前を鍋マスターに任命する！　味の仕上がりが懸かってっからな、責任重大だぞー」
「……うんっ」
目が合ったので王もにこりと首を傾げてみせた。ドラえもんの顔にふわっと明るさが戻る。
メッドの言うとおり全てはお互い様だ。それに何より、なんだかんだ言っても自分達はこの、おひとよしで気だての良いリーダーの心根に惚れているのだ。そうでなかったらリーダーと祀り上げてチームを組んだりしていない。
「えーとじゃあ、これ入れちゃっていいの？　あ、しまった、根菜が先って書いてある。そっちのやつ早く」
「急かさんで欲しいであーる……」
「……おたまとヘラ、どっちがいい？　取ってくるよ……」
「あーもーメッドとろいな、代われ。バイトで鍛えた俺様の包丁さばき見せてやら」
「調子乗って指すっ飛ばすなよエルー」
「ハイハイハイっ！　ぼく、味見する！　味見！」

わいわいと元通り回り始めたみんなに、王も袖をまくり直して加わった。

「はいはい、使い終わった物は片っ端からこっち回して下さい。洗って片づけて場所開けますよー」

「「「おーっ」」」

舌を火傷したリーニョ以上の負傷者は出すことなく、調理実習は至って平和に終了した。

ドラえもんの場合（後書き）

２２世紀に調理実習って……とか突っ込まない方向でお願いします（笑）

きっとコンロはＩＨ。

ドラメッド?世の場合

珍しい取り合わせの訪問者に王は目を丸くした。

キッドとメッド。しかも普段通りの様子でつらっと「王―、ちょっと頼むー」と声をかけてきたキッドに対して、いくぶんきまりの悪そうなメッドが明らかに喧嘩傷とわかるケガで顔面や腕を彩っていることが輪をかけて珍しい。

逆パターンなら腐るほど見ているが、

「……トッカエバーでも使ったんですか?」

「いやいや、完全に俺は俺だしメッドはメッド」

半ば唖然とした王の問いに苦笑で応じるキッド。既に何人かに同じようなことを言われているのかもしれない。

この程度なら保健室に出向くまでもなく手持ちの道具で十分済むので、二人を部屋に招き入れた。

「済まんな王、世話になるであーる……」

「慣れてますのでお構いなく。沁みますよ」

ん、と喉の奥で呻くメッドの頬や口の端に消毒液漬けの脱脂綿をあてながら、「それで、何があったのか聞いても?」と控えめに水を向けてみる。

メッドは変わらず言いづらそうにしていたが、横で治療を見物しているキッドの方が先に口を出した。

「よそのクラスの奴らのケンカ買って睨みあってたんだよ、寮の裏

庭で」
「メッドがですか！？」
声のトーンが跳ね上がった王にますますきまり悪そうに首をすくめたメッドは、上目遣いにキッドを睨みつけながら渋々と言った態で口を開く。
「我輩とて仲間の悪口を見過ごせん時くらいあっても良かろうが。……やはり慣れないことはするものではないであるな。連中に一発も入れられんかった、殴られ損であーる」
「いえ、馬鹿にする気もありませんし心意気は汲みますが……貴方いつもそういう手合いはスルーしてるじゃないですか。まさか正面から受けて立つとは思わなくて」
「始めからキッドに任せておくべきだったであーる。我輩が余計な手を出したばかりに王の手まで煩わせて……」
「あ、そこ、訂正を要求します」
湿布の裏のフィルムをはがすことに神経を集中させつつ王は言った。メッドが意味をはかりかねてきょとんとする。
「私は友人の手当てをすることを『煩わしい』などと思った事はありませんしこれから思う予定もありません。キッドやマタドーラほどちょくちょく気軽に怪我をされては流石にその限りではないですが？」
うわこっち刺してきやがった、と反論の余地をもたないキッドは苦笑いだ。
「……う、む……では、『心配を、かけて』？」
「それなら及第です。はい、次は手を出して下さい」

「メッドはそー言うけどさ、あれは俺とかエルとかじゃなかなかできねェぜー。見てたの途中からだけど」

何故かやたらと機嫌のいいキッドがあっけらかんと語る武勇伝に、内心興味津々で耳を傾ける。メッドのこんなエピソードなどそうそう聞けるものではない。

「俺なら殴られたら受けるか避けるかしてソッコーやり返すけどさ、王も基本的にはそうだろ？　けどこいつ完全に無抵抗のまま一発殴られてから、すっげー静かに睨み返したんだよ。あれ超怖かった。相手の奴らもビビってたもんなー」

「単なる苦し紛れだったのであるがなぁ……頭はとっさについていかんしやり返しても敵わんのは明白であったし」

「そのあと一方的にリンチに入りそうだったから窓から出てって軽く脅してやったら、全員シッポ巻いて逃げてっちまったけど。ま、敵討ちは俺らに任しとけ。うちのメッドをキズモノにしやがった罪は重い！」

「どこぞの箱入り娘みたいですね」

「やーそれにしても、メッドもやるときゃやるんだなー！」

エルなら惚れ直したって言うだろうな、とにこにこしているキッドが何をそこまで喜んでいるのか、やっとわかった。自分達のために、敵わないとわかる相手に向かっていくなどという似合わない行動に出るほど、憤ってくれたことが嬉しいのだろう。

……他人事のように分析してはみたが、王もいたく同感である。

「はい、これでいいですよ。男前が上がりましたね、メッド」

そうそう言われたことのないであろう言葉をかけられたメッドは

しばらく満面の笑みを浮かべた二人を交互に眺めていたが、やがて感化されたのか照れくさそうに頬を緩ませた。
そして直後、「痛っ」と口の端に手をやる。
「あっははは！　しばらくメシ食うの苦行だぜー」
喧嘩傷に関しては一日の長があるキッドがしたり顔で大笑いした。

メッドがキレるくらいなら相当えげつない悪口だったのだろうが、誰が何と言ってあげつらわれたのかに関しては、彼は最後まで口を割らなかった。

数日経って普通クラスの生徒が三人修理工場送りにされたことで、学校中をさまざまな噂が飛び交ったが、真相は闇の中である。
……今のところは。

ホームルームでその報が伝えられた時、友人の二人が驚きもせず目を見交わしてにやついていたことと深い関係があるのではと、王は睨んでいる。

ドラメッド？世の場合（後書き）

「ドラ」を省いて表記するとキッドとメッド、非常に紛らわしいことが発覚しました。
好戦的なメッドはカッコいいと思います。
年齢的にはキッド＜メッド＜王で階段です。

ドラニコフの場合

最後の包帯を留め終えて、その細い腕をゆっくり撫でる。

色素が極端に薄い人工皮膚は最終的に半分近くが包帯で覆われ、露わになっている部分にもところどころ赤黒い傷が走る。痛々しい姿は何度見ても見慣れることはない。

「いつも言ってますけど、もっと自分を大切にして下さい」

毎回恒例の小言を駄目もとでまた唱える。ニコフが答えないのもいつものことだ。

「自分など大切にする価値はない」という刷り込みじみた思いこみは、そう簡単に振り払えるものではないのだろう。それが歯がゆい。

「ねえ、ニコフ」

うつむく小さな頭を、床にしゃがんで下から覗きこむ。淡い綺麗な色の瞳が頼りなく泳いで、マフラーに埋まった口元がぼそりと動いた。声はないが唇の動きで台詞は読める。

ごめんね

何に対してかわからない謝罪もいつものことだ。それが悲しい。

「貴方が痛いと、私達も痛いんですよ」

断線しかけてうまく動かなくなるほど深く切り裂かれた両腕は、ニコフ自身が爪を喰いこませてできたものだ。
暴走を止めるべく駆け寄ってきた仲間達を傷つけまいと、わずかに残った理性が下した選択は矛先を己に向けることだった。

「もっとみんなを頼って下さい。全部一人で背負いこもうとしなくていいんです」
でなければ、何のための仲間だというんですか。

ニコフはかつての自分に少し似ている、と王は思う。

だから放っておけない。ひとに頼ること、手を借りることを知らず、信用できるのは自分だけといつも肩肘張って、背負うものに潰されまいとつっぱることの苦しさを知っているから。

そこから一歩踏み出した先にどんな世界が広がるかも、知っているから。

「王、おわったー……？」

細くドアが開いて、ドラえもんがそろりと声をかけてきた。

「昼ごはん行こう。みんなが席取ってくれてるから」
「あー、ニコフ連れて先に行ってください。これ片づけてから行きます」
「わかった。ニコフ、行こ」

ニコフはそろそろとイスを降り、小さくなってドアへ向かった。
包帯だらけのその手を、昨晩彼の肩を引き裂いた手を、当のドラえもん自身が一瞬のためらいもなく握る。

「えもん、ちょっと」ドアが閉まる寸前で王は呼びとめた。

「ニコフを説教させてやって下さい。誰かガツンと言ってくれるひとに」

「えっ、説教させるの？」

「もっと周りを頼れ、と。私が言ってもいまひとつ効き目が薄いものですから」

得心がいったらしいドラえもんが笑って「王はニコフに甘いもんねえ」と返してきた。

若干心外である。

夜になってもう一度傷を診るためニコフを部屋に招いた。

「随分良くなりましたね。腕の調子は？」

「……うん、だいぶ戻った」

月光灯の副作用なのか何なのか、ニコフの自己修復プログラムは妙に性能がよく怪我の治りも早い。

一日で必要な包帯の量も半減するので、消耗を抑える点でも喜ばしい。不幸中の幸いというべきだろうか。

手早く取り換え終えて腰を上げると、ニコフが静かに王を呼んだ。

「みんなに、怒られちゃったし……昼間のあれ、言い直す。……
……いつも、ありがとう」

上目遣いにおずおずと告げられる。

「……どういたしまして」

「ん……」

今日に入ってはじめて、ニコフの笑顔を見た。

それが嬉しい。

「明日の朝、少し早めにまた来て下さい。それまでには深くない傷は大体塞がるでしょう」

「うん。……明日、学校だもんね。今日は早く、寝ないと」

昼間よりぐっと軽くなった足取りでちょこちょこと廊下へ出ていったかと思うと見送る王に向き直り、生真面目そうにぴっと姿勢を正したその頭がぺこりと下がる。

「これからも、よろしくお願いします」

王も応えて破顔した。

取りようによっては嫌な挨拶だが、ニコフがそんなつもりで言ったのでないことはわかりきっている。おそらく寿命がきて壊れるまでずっとどうにもならないであろうこの現状を、その重荷を、少しでも軽く感じることができるなら。

そして重荷を分け担う一員として自分が参加できるなら。

それ以上望むことはない。

まっすぐなお辞儀を返す。

「はい、承りました」

ドラニコフの場合（後書き）

ニコフと狼についてはいつかもっと掘り下げた話を書きたいです。

ドラリーニョの場合

「いっくよー！　せーのっ！」

昼休みの特別クラスに底抜けに明るい声が響いて、教室にいる全員の目が窓の方を向いた。

声の主はご存知ドラリーニョ。窓際でいつもの面子とわいわいやっていたのであろう彼はそれから誰も何も言う間のないうちに窓枠に足をかけ、

ぽんっ、と外へ身を躍らせた。

その瞬間、クラス中の心の叫びは間違いなくひとつだった。

———ここ、三階！！

「だってここから飛び出したら気持ちいいだろーなって言ったら、そーだなやってみろよって言われたから」

「いやいやいやそれはほら会話の中のちょっとしたあれじゃん、スパイス的な？」

「誰が本気で飛び出すと思うよ！？　一番焦ったの俺らだっつの！」

メッドがものすごい威圧感を発する屋上、槍玉に挙げられたキッドとマタドーラが必死で己の無実を主張する。左足を軽くくじいただけで済んだのは幸運か、もしくはリーニョ持ち前のずば抜けた身体能力の賜物だろう。

保健室で大騒ぎしているうちに昼休みが終わり、かといっておとなしく授業に出る空気でもなくここに場所を移して騒ぎは続行中である。

湿布の貼られたはだしの足をぱたぱた振るリーニョを、「動かしてはいけません、治りが遅くなりますよ」と王が制した。

「あーぁ、しばらくサッカーできなくなっちゃったなぁ。つまんなーい」

ぷうっと膨れたリーニョは目の前で繰り広げられる三人の修羅場っぽいものを他人事のようにスルーして、すぐ楽しそうに空を眺めだした。王もならって座り、昨日台風が通り過ぎたばかりで気持ちよく晴れあがっている屋上からの景色に目を向ける。

ドラえもんとニコフはここにはいない。サボるにしても抜かりはない、ノートを取る係として教室に送り返してあるのだ。

「どうして飛び出そうなんて思ったんですか？」

世間話を振るトーンで軽く王は訊いてみた。リーニョがあれ？という顔で見返す。

「本当にその理由だけで三階から飛び降りるほど、貴方は馬鹿でもないでしょう」

たいていの奴はリーニョのことをただのバカだと思っているが、その評価は正当ではない。少し記憶回路に問題があるだけだ。それと、重度の天然なだけだ。

「うん……あのね、笑わない？」
「笑いませんよ。何ですか？」
「……焼きつけたかったんだ。ほら、すっごくいい天気でしょ？」

蒼穹を一心に見つめる瞳が、午後の太陽を受けてぴかぴかしている。

「教室から外見ててきれいだなーって思って。この景色を忘れちゃうのはもったいないなって思って。飛びこんでひとつになれたら、ちょっとは長く覚えていられるかなって」

恥ずかしそうでもきまり悪そうでもない、いつもの顔で。何が楽しいのかわからないけれどめったに絶やさない笑みと、何を考えているのか分かりにくい、色の薄い大きな目。

考えていないわけではないのだ。それが表に出ないだけで。

「……いいじゃないですか、少しくらい忘れても。これからだってまた山ほど見れますよ。もっと綺麗な眺めも、誰も見たこともないようなものも。この七人で、思い出をいくらでも沢山作ればいい」
「うん。なんとなくわかるよ」

今ここに広がる見慣れた風景の美しさを、いつか忘れてしまって

も。
友人と並んで喋りながら眺めたこの光景が綺麗だったことは、きっと忘れない。

「きれいだったなぁって思うことがいっぱいあれば、思い出がみんなきれいになるもんね！」

リーニョは嬉しそうに足を振る。
「だから動かしちゃ駄目ですって」「あ、そっか」
急いで力を抜いてから、上手いこと左足に体重をかけず器用にぴょんと立ち上がった。

「王もいっしょに見てくれる？　みんなできれいなもの、いっぱい」
「もちろんです。今だってほら、……」

……王は腕時計に目を落とした。そろそろ五時間目の終わりになる。ドラえもんとニコフが迎えに来るだろう。

「……とりあえず、アレをどうにかすべきですよね……」

なるべく意識から締め出していた背後の騒ぎに深いため息が出た。もうそろそろ仲裁に入らなければメッドが巨大化しそうである。面倒な。

「リーニョ、まずはあの三人を止めましょうか」
「わかったー！」

軽快な片足跳びでリーニョが魔の三角エリアに突撃していった。

ドラリーニョの場合（後書き）

リニョ・エル・キッドで黄金トリオだと信じています。
バカ仲間的な意味で。

ドラ・ザ・キッドの場合

（学校上空）

「うわっちょっ待ってくれまだ離すな、まだ離すなってッ」
「ここで離さなきゃ今までと変わらないじゃないですか……」
「心の準備が要んだよ！」
「いきなりそんなでどうするんです、これから二十分耐久になるんですよ？」
「本当にそれで良くなるんだろーな！？」

「始めから百パーセント治るとは言ってません。平均十五分以上高所で我慢すると恐怖感が薄れる傾向がある、という実験結果もあるというだけの話です。それでも構わないから試すと言ったのは貴方ですよキッド」

「わーってるよ！　……卒業までに治さねーとこれから先不便でしょーがねェし」
「ああ、就職決まったんでしたっけ。タイムパトロールに」
「まぁな……」（深呼吸中）
「では始めますか。手、離して下さい。はい、よーい……スタート」

「……」
「……」
「……何か喋ったらどうですか？」
「無理……気が散る……」
「ですから気を散らせた方が良いのではと。あまり集中しすぎても辛いでしょう」
「なら何か話題振ってくれ……」
「そうですね……ジェドが今度パティシエコンテストの国際大会に出るそうなんですよ」
「へー」
「……」
「……」
「少しは話を膨らませようとしなさい！」

「……今何分経った？」
「六分四十七秒です」
「まだ半分以下かよ……もうやだ怖い」
「ここが正念場ですよ、少しは根性見せて下さいほら」
「あー王、あんま遠く行くなー！」
「……何か原因があったりするんですか？　その高所恐怖症」
「さあ、覚えてねェけど……でも昔は、ここまで酷かなかったと思

うんだよ」
「悪化したと」
「低学年の頃にエルが仕掛けてくれやがった罰ゲームのおかげでな。王もいたろあの時」
「あぁ、あれですか……」
「あれで確実にトラウマ増したからな……」
「まったくろくなことをしませんねあの牛は」

「奴だけじゃねェよ。えもんとニコにはショック療法だとかいって屋上から突き落とされそーになったし」
「あの二人が？　貴方また何かしたんじゃないんですかその時」
「お前あの二人甘く見すぎ。けっこー容赦ねえって。まあそんなこんなで、結局マトモなやり方でつき合ってくれたの王だけ」
「それはどうも」
「頼りにしてるぜ、我らが主治医」
「あまりアテにされましてもねぇ……と、そろそろ十分経ちますよ。あと半分」

「うあーやっと半……なんか、高度下がってねェ……？」
「……そういえば……さっき、あの尖塔より上にいましたよね……？」

（ぷしゅー）

「あ、わ、煙！　タケコプター！」
「しまった、バッテリー切れです！」
「ざけんなァァ！！　これだからツメが甘ッ」

（ぶつん）

「「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁ……」」

（またまた失敗、はたして高所恐怖症完全克服なるか！？　後の成果は知っての通り！）

ドラ・ザ・キッドの場合（後書き）

たまにこういう変則的なのを書きたくなります。
会話文だけのＳＳＳが上手い人尊敬する……

次でラストになります。もう少しお付き合いください。

そして、王ドラの場合

「まーったく、人のこと散々バカバカ言っといてよ、なーんだよこのザマはぁ」

ベッドわきに持ちこんだ丸イスの上でマタドーラが歌うように口ずさむ。目線は手元に落としたまま、くるくると包丁を操る手は淀まない。

見舞いのリンゴをウサギ型に切っているのかと思いきや、断然複雑な別の何かだ。器用な男である。

「……不可抗力ですっ」

「優勝しようと思った場合にはな？」

「そうであるよ、王。決勝戦は見ていて相当ひやひやさせられたであーる」

責めるような言葉とは反対にメッドの表情は軽い。腕を組んで壁にもたれ、楽しそうに王に向かって小首をかしげてみせる。

王も苦笑せずにはいられない。

「あそこまで行ったら意地ですよ。ここで引き下がってたまるか、って思いません？」

「思うね、俺なら」

「ほらぁ！」

静かに病室のドアが開き、薬やら包帯やらを満載したトレイを抱えてニコフが滑りこんできた。ベッドの端にそれを置き、湿布とア

ザだらけの王の右腕を取る。
「交換、やってあげる。……左手吊っちゃってる、でしょ？」
決勝で対戦相手の上段蹴りを受け止めた左腕はヒビが入ってしまい、絶対安静とぐるぐる巻きに固定され首に吊られている。スペアの腕を入荷するべきか、それとも修理で事足りるか、明日詳しい検査がなされるらしい。
ニコフは柔らかく笑む。
「……逆だね。いつもと」
「ふふ、そうですね。お願いします、ニコフ」
「ん」
「ほいよ、一丁上がり。誰か食うか？」
マタドーラがちょんと皿に置いたリンゴは、翼を広げた見事な鶴の姿になっていた。
「上手なもんであるなぁ」
「なんなら次はイチゴでやっちゃるぜー」
「食べ物で遊ばないで下さいよ」
「これ……食べるのもったいない、なぁ……」
リンゴ鶴を囲んで盛り上がりだしたところへ廊下から軽快な足音が駆けてきて、ぱんっとドアが開け放たれた。
「おっまたせー！」
「こらリーニョ、しーっ！　病院で走ったり大声を出してはいかん

であーる」
「うんっ、ごめんなさーい」
無邪気に謝りながらリーニョは抱えていた大きなビニール袋をメッドに渡した。
少し遅れてドラえもんとキッドがそれぞれ同じく色々と抱えて入ってきてドアを閉める。「リーニョ、買うものひとつも間違えなかったんだよ。そこは褒めてあげて」さらりと入るリーダーのフォローは今日も優しい。
「王、ミミ子サンから伝言。『あれだけ無茶しないでって言ったのに、王さんのバカ！　もう知らない！』だって。謝りに行っとけばー？」
「……そうします」
遠慮ないキッドのにやにや笑いに、王もかろうじて引きつり笑いのようなものを張りつけて応える。
彼女がこのテの問題で怒ると長い。そして手ごわい。今度はどうやって機嫌を取ったものか。
それにしてもやけに袋が多いと思ったら、キッドが出してきたのは買い物とは何の関係もないものばかりだった。
「ほらこれ飾っとけよ」
輝く黄金のトロフィー。件の格闘技大会で頂点に立った王が勝ち取り、寮の自室に置いておくよう頼んだはずだが。
「ああ、俺が持って来いって頼んだの」

受け取ったトロフィーをサイドテーブルにリンゴ鶴と並べて置きながら、マタドーラがにやりと口の端を吊り上げた。
「コレのためだろ、その名誉の負傷はさ。せいぜい撫で回して悦に入っとけ」
「誰が撫で回すんですかっ」
威勢よく言い返して背もたれにしていたヘッドボードから背中を浮かせた王の手に、ドラえもんがすぽっと缶コーヒーを差しこんだ。
「ブレンドの微糖でよかったよね？」
「あ、ええ。ありがとうございます」
「みてみてー王、ラー油とお酢としょうゆ！　ちゃんと準備してきたよー」
「そうだ、それからメッドに頼まれた本も。キッド持ってきた？」
「きたきた。くそ重いッつーの、何冊あんだよ」
「お主以前読みたいと言っとったであろ。入院中暇そうであるし、他にも良さそうなのをいくつか見つくろってきたであーる」
「……はい。右手、終わった」
「えもん、どら焼きいくつ買った？　六人でカンパだからな、エルもちゃんと払えよ」
「えー勘弁してよキッド様、そんなに手持ちねえよ今。立て替えて」
「立て替えもツケもナシ、今、キャッシュ！　見舞いになんねェだろが！」
「なんだか、居心地悪いくらいに至れり尽くせりですねぇ」
思わず笑い出した王に、仲間達のぴったり揃った異口同音が返る。

たまには返させてよ！

「いっつも王にはあれやこれやカリ作ってっからなあ、ここらでドバッと返しとかねえと」
「そーそー、こんな時くらい僕らの恩返しにつきあってよ」
「こーゆうのってあれだよね、えーっと、ぎ、ギフト、テープ？」
「ギブアンドテイクな」
「そうそれ！」
「うむ。受け取ってばかりではつまらんであーるからな」

これが単なる金属と電気信号の集合体だなんて、０と１との組み合わせだなんて、信じられないくらいの。

あたたかさ。

王は思う。噛みしめるように思う。

彼らの友人で、ドラえもんズの一員になれて、本当に良かった。

「えーそれでは皆様、お手を拝借！」

マタドーラのおどけた合図でみんなが一斉に、めいめい手にした缶飲料を頭上にかかげる。

「これより王の優勝祝いパーティーを始める！　乾杯！」

そして、王ドラの場合（後書き）

はい、おしまいです。

各話の長さはルーズリーフ1枚以内が目安でしたが、最後の王さんは最後だしメインなので気にせず延長。

また何かネタがたまったら投下したいと思います。ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8673n/

ザ☆ドラえもんズ　～僕らの専属ドクター～

2010年10月10日06時09分発行